

祖父パーマーを語る

樋口次郎

駆けつけて参りましたので今やっと汗が収まってきたところです。私はご紹介を頂きました樋口です。

ちょうど六年前の一九八七年が横浜に祖父が水道を完成させてから数えて百年になるということ、百年記念事業準備委員会が今から十数年前に横浜市の水道局の中に編成されました。私の少年の頃から横浜市の水道局の方々は家に出入りされていたもの、すから私も母もなにかと縁があります。母というのはパーマーと日本女性、私の祖母との間の子供として、パーマーにとっては、母は後から知ったのです。が十番目の子供です。

その母が大切にしていた本があります。それは一八九四年に「J A P A N M A I L」社のブリック

リー大尉が編集しました「日出づる国からの手紙」という本です。装丁も茶色く古くなっておりましたが子供心にどんな事が書いてあるのだろうと思っております。

それはパーマーが生前、日本から「ザ・タイムズ」(ロンドン タイムズ)に投稿した記事を集めた本で非常に読み難く、難しい単語が多く、また、句読点、ピリオドが非常に少ない長文なので中学生の私にはとても難しかったです。

いつかこの本をじっくり読んでみようと思っていたときに、横浜市水道局で百年祭の準備が始まったわけです。私もちょうど四十年勤めておりました横浜のある貿易商社を引退しましたので、これを機会



に祖父の研究を本格的に始めたのです。

資料を集めるため国会図書館、開港資料館などに約二年間通い詰めているうちに、私はだんだんとパーマーの足跡を知ることができました。特に印象深く感謝しているのは、次の二つのことです。一つは私の姉の長男がイスラエルのヘブライ大学に行っておりまして、大学図書館で「オックスフォード ナショナル デイクシヨナリー」の中にH・S・パーマーの経歴が書いてあるのを見付け早速送ってくれたことです。

二つ目は同じ頃、オーストラリアの国立大学に留学していた私の長男がこれも大学図書館でパーマーが日本から「ザ・タイムズ」に投稿した約四十数篇の記事を見付け（「ザ・タイムズ」が復刻され、またJAPANESE INDEXという日本関係の記事の目録が作られていたのです）コピーをとり全部私に送ってくれたことです。この貴重な資料のおかげで私はパーマーがどのような仕事をしたか、また、どのような記事を書いていたかやっとなってきたので

す。

ちょうど一九八七年、今から六年前の水道百年記念祭に間に合うように私は懸命に努力致しまして、パーマーに関する研究をすすめ、様々な機会に発表致してきました。ここにおられる水道新聞の中西氏もことあるごとに私に原稿を依頼され、ずいぶん書かされたものです。その関係で「水道公論」「水道評論」「水道雑誌」などにも記事を書きました。

さて、先程稲場先生がご紹介になられた横浜開港資料館の堀さんと私は大変親しくしております。私と堀さんが数ヶ月費して「JAPANESE WATER MILE」の中に掲載されている記事から横浜の飲料水の問題と排水の問題の記事を選んで翻訳し解説致した本が私の後ろに飾ってある「横浜水道関係資料集」(一八六二年〜一八九七年)です。この本は専門の方々の評判が良く、私共は非常に喜んでおります。「JAPANESE WATER MILE」は幸いなことに、横浜開港資料館で全部複製されておりますので、私共には一八七〇年からブリンクリ

ー大尉が死ぬ一九一一年までの重要な出来事を知ることができ、大変貴重な資料です。

さて、H・S・パーマーのことは本日のために皆さんがお作りになられた「近代上下水道の功労者たちのプロフィール」の中に出ておりますから後程お読み頂くとして、私は今日は彼の略歴とバルトンとの接点についてお話したいと思います。私は大変に話下手なので、その点はお許し下さい。

突拍子もないところから話を始めますが、先程稲場さんが青山のバルトンの墓に日本に住む友人たちがこれを建てたと彫られているとお話になりました。パーマーの墓にも同じ句が彫られておりますが、彼の墓には其の他に「NON OMNIS MORIARI」という句が彫られているのにお気付きになると思います。この句の出典と内容を調べようと国会図書館で「ギリシャラテン引用語辞典」を見たところ、これはホラチウスが書いた長編の詩、カルミナの中の、「私は全くは死せざるべし、私の大部分は葬儀の神リビチナを逃るるならん」という薄

気味悪い内容の詩の一部であることが分ったのです。

何故このような句を彼を知る友人たちが彫ったかと私なりに解釈しますとまず第一に彼が横浜の水道建設を進めているとき、コレラに悩む大阪、神戸、函館、東京などの知事たち（東京の場合は渋沢栄一の東京水道会社でした）が彼に水道布設計画をたてるよう依頼して彼は忙しい中合間を見ては各地に赴き設計を行い計画書を提出しておりました。しかし各々が何しろ膨大な資金を必要とする工事であるため、何れも予算がとれず一件も具体化しなかったことだと思えます。

次に予算を二割も減らされながらやっとの思いで完成させた横浜の新水道が急激な人口増加により利用者が増えたため給水不足となり、これを是正するには金がかかり、時間もかかるため、遂には最初のパーマーの設計が悪かったのだと言われる始末となり、パーマーは苦しい立場になり、おまけに水道条例が發布され、水道の設計にタッチ出来なくなったことだと思えます。

次は彼が神奈川県知事沖守国と親しかった関係で横浜の築港問題にも早くから関係しており、大隈外相も彼をバックアップしてパーマーの監督で、横浜築港工事を遂行することになったため揚句の果てには彼を死に追いやるトラブルが起きたことです。

最後が彼が歴代の外務大臣の意を受けて遂行していた不平等条約改正のための努力が無に帰しそうな風向きになったことです。

以上述べた理由から彼が五十四才の若さで思うように仕事が進展せず悶々の状態で死に追いやられたことを親友のプリンクリー大尉などが「私は全くは死せざるべし」という痛切な意味を含むラテン詩の墓碑を彫って花向けとしたのだと私は考えております。

さて、バルトンが生まれたのは一八五六年五月、亡くなったのが一八九九年八月、四十三才でした。パーマーは一八三八年四月に生まれ一八九三年二月に五十四才で亡くなりました。バルトンが日本に来たのは一八八七年、パーマーが公式に来日したのは、

一八八五年でしたが、香港在任中に一八七九、八〇、八一、八二年と四年続けて非公式に來日しております。パーマーは日本という国を香港という身近な所から觀察していたと言えます。

これからパーマーの経歴についてお話し致します。彼は英国ケント州のスノットランド出の準貴族階級の祖先を持っています。

一六九九年からの家系図を見ますと、男性は大體、聖職者と言いますか、ビショップ（BISHOP）とかヴィカー（VICAR）が多く、女性は大體貴族に嫁いでおります。十八、九世紀になりますと、陸軍軍人、殊にビルマ、インド、オーストラリア、ニュージーランドに派遣される陸軍軍人が多く出ています。

パーマーは父が東インド会社付きの參謀中佐の時にインドのマドラス地区のバンガローという所で一八三八年四月三十日に生まれました。生後暫らくして、母を失いましたが、母の兄である後の陸地測量部長官となった陸軍工兵中將のジェームズ卿が彼

の面倒を見ていたと思われます。彼は十八才の時にウーリッチの士官学校に入り、工兵技術専門學校を出て工兵中尉に任官しました。

二年後にはカナダのブリティッシュコロンビアへ派遣されます。米国のカリフォルニアに砂金が見つかり、世界の荒くれ男たちがゴールドラッシュですっかり秩序を乱した後、今度はカナダのフレーザー河流域に砂金が出るというので再び荒くれ男たちが移動し始めた頃です。その時に同地方の秩序維持のため、また植民地建設のため王立工兵隊の中から特殊技能を持つ隊員を家族連れで、五年間勤務すること、その間飲酒をしないという条件で植民大臣が約百五十名を選び、パーマー中尉、その他数名の將校が同行し、五百トンぐらいの小さな船に乗り約六ヶ月航海してブリティッシュコロンビアに赴いたのであります。そこで彼は新しい植民地の仕事に携わり、現地で結婚をして一八六六年ですか二十八才のときに帰って來ました。それから彼は測量畑に長年携わっております。

アラビア大陸の入口にシナイ半島があります。最近までイスラエルとエジプトがもめていた所です。

またご承知のように旧約聖書の舞台で、そこにはモーゼがエジプトからユダ人を連れて脱出し、スエズ運河を渡り、シナイ半島を経て憧れのカナンの地へ赴いたという有名な「出エジプト記」(EXODUS)の物語があります。これが実際にあったのかという問題を実証的に調べるためパーマー大尉が発案しジェームズ卿の賛同を得、彼が隊長となり一八六九年に陸地測量部、オリエント学者、および聖職者三者が合同して調査に参りました。その調査報告書の中の担当部分が彼の筆になるものでした。

彼は文章を書くのが得意で、彼の経歴の節目毎に正規な報告書の外に、地理学会、天文学会、宗教学会、考古学会等に様々な報告書を送っております。測量学及び測地天文学の専門家として彼は「大英帝国の土地測量の目的、その歴史と現状」及び「実用天文学」(工兵将校楷書)を書いており、またキリスト教知識普及教会の依頼で「シナイ」と題する本

も出版しました。

一八七四年にパーマー少佐は金星の太陽面経過という百年に一度ともいうべき珍しい天体現象をニュージーランドで観測するように指名されグリニッチ天文台で特訓を受け数人の専門家を同道の上出発しました。同じ頃日本にはフランス隊、メキシコ隊が来日したという記録があります。其後彼は工兵隊に復帰しましたが、再び外国勤務となり、西印度諸島のバルバドス島に赴任し一八七八年からは工兵隊主任技官及びバルバドス島総督から香港総督となったポープ。ヘネシー卿の副官として香港に着任しました。

ヘネシー卿が休暇で日本を訪問した後、日本のことを調べるよう頼まれたのでしょうかパーマー中佐は一八七九年初めて日本の土を踏みました。翌一八八〇年にも彼は休暇で来日しました。香港ではあまり仕事はしておらず、「同地に総合的な天文気象観測台を設立する案」を提出したぐらいでした。

一八八一年の三度目の来日はビクトリア女王の曾

孫二人の随行員としてやってきました。其の頃から彼は、日本、特に日本の若い為政者たちの動きに非常に着目しておりました。またその頃横浜にはブリンクリー大尉という人が「ジャパン メール」紙を経営していました。

彼はパーマー中佐とは王立士官学校の同窓生として非常に仲が良く、彼自身も優れた科学者であり、フェアに物事を見られる人で東洋における英国の植民地、居留地にいる同国人の動きに非常に批判的な眼を向けておりました。さて、パーマー中佐は三度にわたる訪日の経験、およびブリンクリー大尉から様々な資料を提供されたのでしよう、一八八一年末頃に「最近の日本の発達」という膨大な論文を英国の「ブリティッシュ クォーターリー レヴュー」紙に投稿して、それが一八八二年の七月号に掲載されました。これが著名な科学週刊紙「ネーチュア」によって激賞された経緯がありますほど日本に関する的確な報告が行われたのです。

それ故、不平等条約に悩み何とかして改正にもつ

て行こうとひたすら願う井上馨や大隈重信はパーマーを「日本の友人」として考え、英国の世論、英国の政策を動かすため彼に一役かって貰おうとしたわけですね。彼は一八八二年十二月マンチェスターの工兵隊司令官として赴任の途、横浜に到着し、東京のパークス英国公使邸に宿泊しておりました。

その頃、横浜の英国人居留民一同からパークス公使宛にコレラに悩まされている横浜に近代的な水道設備の建設を求める強い要望書が出されており、公使も井上外務卿を通じ神奈川県知事が懸命に水道建設の努力をしていることを知っておりましたので、水道に詳しいパーマー中佐が来日しているから工学者同道の上、公使官邸に年が明けたら来るようにと外務卿に連絡をしたのです。沖知事と三田善太郎の二人がパークス邸に赴いてパーマー中佐に会ったことから横浜水道の話が具体化したわけですね。

本国マンチェスターの工兵司令官に赴任の途、横浜に立ち寄った彼は横浜で仕事をするようになり、三ヶ月の特別休暇が許可されてからパーマーは三田

氏や若い技術者とともに水路の調査に出掛け、従来の多摩川からの水路と新しく相模川水系道志川の水路の二つの報告書を作成して、一八八三年六月に帰英致しました。

冲県知事、三田技師、井上馨外務卿の努力の結果ようやく約二年後に、当初一二七万円の予算は百万円に削られました。が具体化し、冲知事からマンチェスターにその旨打電されました。彼は日本で特別任務に携わるといふことで陸軍から許可が下り、一八八五年四月に来日致しました。

その前に彼は既にプリンクリーや井上馨から日本の世論、不平等条約改正に対する熱望、日本にある居留地の秩序の状態などを知らされておりますので、それをまとめて「マンチェスター ガーディアン」、「デイリー ニューズ」、「ザ・タイムズ」等に投稿して英国の世論を条約改正に向けるキャンペーンを始めておりました。井上馨がパーマーの来日直前の一八八四年九月十三日、彼宛に送った私信の中で、パーマーのキャンペーンを感謝し、冲知事の横浜水

道具体化の努力も近く実るだろうと告げるとともに、彼の来日前に「ザ・タイムズ」他有力な新聞と通信員契約を結ぶことが出来れば非常に嬉しいと書いております。井上の希望通り彼は「ザ・タイムズ」の隠れた通信員としても来日したのです。

冲県知事はパーマーには横浜の居留地に住んで貰う予定であつたのですが井上外務卿の意向により、外交事務をとるため、結局、彼は東京に住居を構え、水道建設のためには東京から横浜に通うことになりました。横浜の水道がそろそろ完成に近づく頃、彼の舞台は大阪、神戸へと移っていきます。

バルトンが日本に招かれた理由は当時の日本の劣悪な衛生状態の改善のため先づは衛生工学を東大で教えるとともに、衛生技師として内務省に雇われましたが、パーマーは頻発するコレラ、チフス等水系伝染病の予防のため水道建設という実務部門に直接呼ばれ大阪、神戸、函館、東京というように具体的に水道建設計画を練り設計書を提出したのです。それと同時に彼は横浜で英国から招いた他の技師たち

と共に日本人技術者の養成に力を入れております。日本人技術者もそれに応え、西欧技術の吸収にひたむきの努力をしておりました。

横浜の新水道はこのように密接な東西の協力の賜物として立派に出来上りました。一八八七年の十月のことです。水道建設の間に彼の評判は横浜において極めて高くなり、県当局と横浜の有力商人から貧弱な横浜の港湾設備の改善のために協力するよう依頼されることになりました。そこで、しばらくして彼は内務省土木局に早くから招かれていたオランダ人技術者たちと衝突するようになります。今から考えると超法規的な決め方のようにみえますが、大隈外相は条約改正キャンペーンを長年にわたり展開しているパーマー少将を高く評価し、結局パーマー監督の下で横浜水道建設の際と同様、横浜の築港も神奈川県知事の管理下で行うよう黒田首相に建言した結果、閣議決定により大隈外相の建言は採用されました。これが内務省土木局を非常に強く刺激することになり、ここでは触れませんが様々な事件がしばら

くして続発することになります。

この他に、彼は王子製紙（その頃は国営）の製紙用浄水設備と兵庫県三木市御坂のサイフォン式灌漑設備も、設計監督し完成させております。

パーマーを紹介する色々な記事の中に、横浜水道完成後、彼は数回帰国したとありますが彼が一時帰国したのは一八九〇年に築港用器械の調査に五ヶ月ほど出張しただけで、その他には海外には出ておりません。結局彼は水に関係のある仕事に多く携わりながら、皮肉なことに水系伝染病であるチフスにかかり、その後リユーマチズム、そして卒中症となり一八九三年二月に東京で死にました。様々な妨害工作の中、思うように築港の仕事が進まず悶々（もんもん）の状態で死んでしまいました。

彼が水関係の仕事と平行しておこなっていたジャーナリストとしての仕事、条約改正を推進させるためのキャンペーン活動もまた行き詰まってきました。せっかく綺麗な水を引き横浜の人々から愛され感謝されていた彼も日本が徐々にレベルアップしてくる

につれ、お雇い外国人もいなくなり、全体的な社会風潮も国粹的となってしまったのです。

また、彼は横浜にいる同国人、不平等条約にしがみ付き、植民地根性まるだしの同国人に対し、片々たる居留民の利益よりも条約改正を行ったほうが英国全体の利益となるのだと訴え続けたため、彼らからすっかり敵視されておりました。日本人側からも井上、大隈案にみられる屈辱的な条件を進んでキャペーンしているということに恨まれており、両々相まって非常に辛い立場に立たされていたと思います。

私はつきざる思いもひとしおなのですが、パーマーに関するお話しはお手元の「プロフィール」をお読み頂くことにしてこれで終らせて頂きます。

さて、これから残りの時間を本日の「バルトン忌」にちなみ、「ジャパン ウィークリー メール」に紹介されたバルトンの記事、バルトンとパーマー関係の記事をいくつかご紹介したいと思います。

一八八七年六月十一日の「ジャパン ウィークリー

メール」は「新任の衛生工學教授バルトン氏」という題で、今回東大は衛生工學専任教師を招聘するため適格な人を選中、バルトン氏が選ばれたと書いています。氏はロンドン衛生保護协会会员であり、上級衛生技師であり、これまでにセント・トマス病院、東ロンドン眼科病院、北東地区の小児病院、イートン校及び寄宿舎、ケンブリッジ大学、等の衛生設備の修理及び建設事業に従事した数少い衛生工學の權威者の一人であるので、東京および日本の他の地域で多くの有益な衛生改革を遂行出来る人材であるとバルトン氏の来日を歓迎しております。

一八八八年四月二十一日の「同紙」は「衛生設備の改革」と題する小論を掲載し、当時の劣悪な日本の上下水道設備（飲料水、生活排水すべてを含む）の現情を述べ、今回来日したW・K・バルトン氏の「北日本の衛生状態」と題する小論を紹介するとともに別欄にこのバルトン氏の報告書の全文を掲載しました。この報告書は一八八七年バルトン氏が来日直後の夏休みを利用して東北地方の衛生状態を調べ

るよう委託され、日本人スタッフと共に函館、秋田、青森、仙台等の中小都市の飲料水、下水の状態をくまなく調査し、衛生工学の観点から忌憚なく持論を展開した貴重な報告です（紹介記事を書いたのはパーマーであると思われます）。

同年八月十一日の「JWM」はバルトン教授が優れた写真家でもあることを紹介しています。その記事は例の七月十五日の磐梯山の爆発に際し教授は大学総長の命を受け現地へ赴き、得意のカメラワークで爆発の惨状をカメラに納めて帰ったと伝えていきます。

また同年十月二十七日の「JWM」は「磐梯山の爆発」と題する記事の中で十月二十五日に横浜山手の公会堂（今のゲイエティ座）において、磐梯山爆発に関する学術報告会が多勢の観衆を前にして行われたと伝えております。

発言者が現地をくまなく調査した関谷教授で、関谷氏が咽喉を痛めていたので報告書を代読したのがバルトン教授、それに地震学のオーソリティで関谷

教授を一時は教えたこともあるジョン・ミルン教授、最後に現地の生々しい惨状をカメラに納めたバルトン氏が幻燈で彼のとった写真を紹介しました。この報告会を司会したのが祖父のパーマー少将という多彩な人物たちの集まりだったわけです。

この他にもバルトンとパーマーの接点と言いますか、神戸水道と東京水道の件でパーマーが先に提出した計画案が資金面から時期尚早で具体化せず、具体化した時にはバルトンに依頼されたということでお互いに気まずい成行になり、釈明する記事なども二、三あります。

最後になりましたが写真家としてのバルトンに関する記事が渋沢史料館所蔵の「小川一真創業記念三十年誌」の中にありますので紹介させて頂きます。

「小川一真は明治二十三年大学教授英人バルトン氏と写真協会を創立し・・・また、同二十四年帝国大学教授ミルン、バルトン合著日本大地震の出版を助け之を勢出す・・・」この明治二十四年の大地震とはいわゆる濃尾の大地震でパーマーも二十四年

十二月八日に「ザ・タイムズ」に報告しております。
ご存知だと思いますが、ここにあります小川一真が
写した「東京帝国大学教授W・K・バルトン君」の
スナップは和服姿のバルトンが火鉢を横に煙管を持
った姿でなかなか面白いものです。ご参考までに。
ではこれで私の拙いはなしを終わらせて頂きます。
有難うございました。（拍手）

